

# 保育者の児童観



—— 覚え書として —— (3)

高橋 さやか

## 2、発育という事実をめぐる(つづき)

### (2) 条件の獲得

子どもが、成長し発育する条件は、子どもにとってどこまでも受身な、外部的な刺激によるものもあり、一方、それら外部的な刺激をうけ入れるうけ入れ方や、(外部的刺激をうけ入れた結果をも含めてではあるが)内部的な体制による個体自身の独自の能力によって生ずるものもある。

ここでは、子どもがもっている発育の能力について考えたいのであるが、基本的な生命力(とでもいうべき力)に結合されるさまじまな条件の複合を考え、それを明瞭に分析しときほごしてゆくことは、手のつけようもない錯雑さに圧倒されるような気もちにかられる事実だと思ふ。

ただ、はつきりさせたいことは、子ども(人間)が条件の集積であるばかりでなく、自己の条件——特に成長・発育に必要な条件を

自分で獲得しつつその発達を遂げるものだということである。前節のべた既往・既成の条件は、しばしば保育者にとってその子どもの決定的な素質であるようにうけとられ易い。いったい、素質ということばもはなはだ曖昧であるが、すでにのべてきた通り条件の集積という見方からすれば、その条件以外に素質とよぶべきものもともとなかったといわなければならない(但し、例えば、遺伝的條件を素質とよぶ、というふうなことばの意義づけをすれば「素質」も消失してしまはしないが)。そして、既往・既成の条件とはいっても、条件は、くみ合わせをかえることによつて新しい形(実状)を現出することが可能なものであるといえる。更に、成長するものは、常に同じ状態にとどまるものではなく、絶えず条件を更新してゆくものである。

二年ほど前(一九五七年)に私の勤める園に在園した子どもが、ちょうどその公判のはじまったころのある朝、登園するや開口一番「せんせい、営生事件、おもしろくなりそうだね!」と言ったも

のである。

T・K、五歳一〇か月。

父 NHKアナウンサー。

母 旧制高女卒 職業なし。本人は長男。

二歳ちがいで弟が生まれたが夭折。ごく最近妹が誕生（この発言をした当時まだ一か月にならない）。

同居ではないがかなり親しく往来のある祖父母健在。

アパート居住。

本人の既往症 麻疹、中耳炎。

其の他生育歴に特記すべきものなし。

身長 一〇五、 体重一五・八〇。

この子どもは園で保育二年めに入るころ（私の園では三年または二年保育児以外はとらない）そろそろいわゆる「変っている」ことが目立ちはじめていた。かなり気まぐれで調和協調に欠ける面があり、絵はすぐれていた（のびのびと独創に富んだ力づよいものがあった）が、他の活動ではどうも優秀とは言いかねた。気がむけばよくしゃべり、ことに一対一で先生が耳を傾けてくれるときはよく話をしたが、集団の中で落着いてすじの通った話をするとはうまいとはいえなかった。I・Q一三六、もとよりすぐれている仲間に入るわけであるが、同じテストした中に一四〇以上をなお三名もかぞえたから、ひとりずばぬけているというほどでもないともみられる。父とは友だちづき合いでよく話すという。

クラスいっしょに海岸に散歩に出たとき、ちよつとした石垣から

とび下りるところに来て、いざさかしりごみをした彼が「ぼく、こんなとき空飛ぶじゅうたんがほしいなあ」といい、もうひとり「うん、でもヘリコプターでもいいじゃない？」（この子もI・Qの高い子だが、Tと比べると万事円滑で常識的だ）というので、だげだだだ、せまいんだもの、ヘリコプターは大きすぎる。小さい空とぶじゅうたんでなきゃ、ぼく、いやだな。空とぶじゅうたんはね、使ったあときれいにたためるのもん。だからいいだろ」といったことがある。水蓮のうたをうたっていると「ばかりこばかりこって何！」ときく。

「すいれんの花の咲く音だろ、ね、せんせい」と他の子がいうのにつかり「きつとそうね」と、先生が答えれば「ほんど？ だって花が咲くときはそおと咲くんだよ、ばかりこなんていわないよ。せんせい、きいたことある？」と追撃。駈けて、園の玄関に入るなり「空気、空気、せんせい空気ちょうだい、早く、早く！」と呼ぶ。

こう書くと、頭がよくいかにも生氣はつらつとしているようだが、園生活全体を通じて、そう活発な方ではなく、いったいに友だちと遊ばないし、また友だちそのものもないというに近い（ヘリコプターといった子が漸く時たまの話し相手になる）。余裕もないのでTのエピソードをこの上とりあげるのは控えるが、とにかくかなり独特な頭脳の働きをもっていることだけは、以上（菅生事件云々をも含めて）の発言からだけでも推察していただけよう。

問題は、Tにあらわれた個性がどのようにして形成されたか、そしてこの個性が果してどのように伸びてゆくか、ということである。

母親はよい意味で平凡な、出しゃばりでも内気でもなく教育熱心

というほどでもなくまた無関心無理解なのでもない、ごくあたりまえなよいお母さんであるが、同年輩の友だちも少なく「変っている」と案じ、園を参観してみても遊戯や歌唱などあまりしていないところから「遅れているのではないか」とまで気づかっていた。I・Qの点からはさきあげたようにおくられているところではないが、たしかに園生活の間はともかくとしてこのまま学校に入って、I・Qが保証するような学業成績をあげるか否かは疑問だとされそのような面がうけとれるのである。つまり、社会的適応性がなく、集団の中で能力を発揮することができない(部分的にはできて)結果を見せるのである。

T自身にも、特に内向的とか社会性に欠けるとかいう傾向は、本来にはなかったのではないかと考える。ただ、同じく父と友だちづきあいをするとといっても、父が子に調子をあわせるのではなく、子がその思考対象まで父に調子をあわせ、結構「おもしろ」がっているのは何に由来するのか単純にはわりきれないところである。そしてTはおもしろく思うことがおとなに似た結果、同輩の友だちのいうことや遊びにあまり興味がもてず、したがって園生活では気まぐれで協力的でなくなってきたのではないかと考えられる。アナウンサーやジャーナリストの子はTだけではないし、父と子が友だちづき合いの家庭も他にもある。Tが父(全面的にそうみることは疑問もあるが)に一応そうみておく)に適応して園生活に十分適応しないという事実は、どういうことなのであろうか。Tは自覚しての上ではないにしても、明きらかに自己の成長の方向——発達の傾向

を、選択したのである。はっきり認識しているかないかは別として、Tにとっては、子どもよりおとなが、友だちより父親(の言ったり、考えたり、したりすること)の方が実際問題として魅力的だったのである。

勿論そうなった素因はいくつか求めることができるであろう。敏腕なジャーナリストは一種颯爽とした歯切れのよい生き生きした雰囲気をもっているし最初のわが子に対しても愛情とともに職業柄の物見高い? 興味も覚えて、知らず知らずインタビューでもするよいうな調子であやしたり、からかったり、対等に話しかけたりすれば、赤ん坊のころからそういう父親のペースにのせられた気風が身についたものとなるのかもしれないということもある。五年ばかりもひとりっ子同様であったことはその傾向をますます助長したのであろうし、遺伝的条件も恐らくは普通以上の頭脳であるとともに、日常生活に、知的なやりとりが重ね重ねつづけられているとなれば、当然こましゃくられた理くつっぽい傾向に育つことは異とするに当らない。

この場合一つ一つの条件は決して悪いとはいえない。また事実、Tの現在もっている能力や傾向も一つ一つとあげてみればマイナスというよりはむしろプラスに評価すべき点が多いと考えられる。しかもなおTは総合的にみた評価の上では劣っている子どもになりかねないのである。これは結局外部から加えられた条件と、内部的な体制による能力とがあまりに一つの方向に偏ったまま狭い範囲をうちひろげることなしに条件を重ねてしまったことの過誤である。

冬を向かえようとする頃私たちはTの重大なファクター——見過ごされていた一要素を知らされた。家庭でも気づかれていなかったのだが、彼は直ったと思われていた中耳炎が慢性化して、時々難聴におち入っていたらしかったのである。気まぐれでいうことを聞かないと思われていた場合のあるときは、実際に相手のことばそのものが聞こえていなかったかもしれないのである。おとなでも難聴者は自分勝手な思考や判断におち入りやすい。Tがその知的な傾向を一般の枠から外れた独自の方向に伸ばした一半の理由——少なくとも手がかりがやとつかめたように私は思った。Tは、他との関係において成長することに不利な条件があったために、自分の中にとじこもって成長せざるを得なかったのだ。その成長は、足ぶみすることなくずっと続いていたのだが、偏ってしまったのである。耳の問題だけがTの鍵であるとは私も考えない。簡単にはきめられないことである。

ただ、私は、Tがこんなに鋭い(説明不十分であると思うが、種々の彼の言動はただおとなっぽくこましゃくれているだけではなく、五歳余りの子どもらしいナイーヴなロマンティシズムもあり、清新可憐な感覚を示す日常些事の記録はまだ多くを留めている)一方で、ともすれば不適応症におち入りそうになる傾向に、既往・既成の条件との上に立つ新しい条件の獲得との間にある微妙でしかも強力な作用を、一つの切実・切迫した形として見せられているということを言いたかったのである。

子どもは、自分の発育の条件を半ばは自分自身で獲得し、あるいは

は選択する。

この条件の獲得という問題は、通常心理学で言われるところの可塑性とか、順応もしくは適応とかいわれる事情よりも、もう少し積極的なものがあるのではないだろうか。子どもに好ましい条件を吸収させるためには、子ども自身が獲得しようとする能動的な体制にタイアップする必要があるが教育・保育者の側に必要であるということができると考えられる。

現代の保育者として、今更、十九世紀的な児童中心主義をむしろえそうとするつもりではない。個体自身のもつ能力、また個性とよばれるものは、非常に純粹かつ緻密な意味ではないものであって、ファクターに還元してみれば恐らくは常に普遍的なもの以外にはないであろうこと、ただ、その結合あるいは複合の様相はほとんど無限に多様であって、そこに個性というべきものが現出することを認めようとするのである。そういう意味で、私は保育者として子どものもつ個性に忠実でありたいと願う。また個性に忠実であると同時に、偏りや歪みがあれば、それを生じた条件に対抗し得る条件を提出して正常なところまで形成し直したいと考える。そして、条件を提供するものとして保育者に相当の責務が負わされていること、しかしながら条件を吸収し獲得する主体者はどこまでも子ども自身であることを確認したいと思う。まわりくどくなっただけでも、子どもに一個の独立した人格をみとめるという最初の命題にここで帰ってきたことになる次第である。